

山川静夫

名手名言

密 女 の 祕

昭和三十四年十二月一日 印刷
昭和三十四年十二月五日 發行

定價貳百參拾圓

著 者 ◎ 圓 地 文 子

發行者 佐藤 亮 一

東京都新宿區矢來町七十一

今文印刷 二光印刷株式會社

表 本 東京牛込加藤製本

發行所 株式會社 新潮 社

東京都新宿區矢來町七十一
電話東京三四局代表七一(九)
振替東京八〇八番

文 春 文 庫

名 手 名 言

山 川 静 夫



文 藝 春 秋

名手名言◎目次

稽古は花鳥風月に在り……………	9
ひっぱったりひっぱられたり……………	16
木は賢い……………	23
歌舞伎は黒蜜豆みたいなもんだ……………	30
絵にならん顔は生まれつきや……………	37
すべて、ひかえめにやることです……………	44
甘党には特級酒でも喜ばれないでしょ……………	51
とぎしつつねむることあり……………	59
最も大切なのは平常心……………	66
どの子も育つ親しだい……………	73
本当に清元が好きなんだ……………	80
芸人は線香花火になるな……………	87
日本人が日本の音楽をやるのは当りまえ……………	94

私は私です……………101

待つなんて料理人に対する侮辱です……………108

拈華微笑……………114

嫌いな人に逢ったことがない……………121

行くも夢、止まるも夢……………129

理屈でわかつちやいかんのです……………136

一日一歩……………143

芝居は面白くなくっちゃ……………150

そない喰ったらモノ忘れるわ……………157

土の気持になれなきや駄目ね……………164

こんな仕事で銭がとれるかって……………171

お代は見てのお帰りよ……………178

孝夫は角行、仁左衛門は馬……………185

俺の出し物なものになあ……………192

充電してきますよ……………199

意外に相手の話をよく聞いています……………206

同じ機嫌の風車……………214

気合です……………221

朕モクは金!……………228

蘇鉄は生えているか……………235

ケ・セラ・セラ……………242

愛情は残ってます……………249

私って、こわい?……………256

あとがき——名言の周辺……………263

解説 矢野誠一……………268

名手名言

初出誌一覧（掲載年月号は本文末に記載）

「こんな仕事で銭がとれるかって」「孝夫は角行、仁左衛門は馬」「充電してきますよ」
「蘇鉄は生えているか」「愛情は残ってます」「私って、こわい？」……『諸君！』（文藝春秋）
「待つなんて料理人に対する侮辱です」……『茶道の研究』（大日本茶道学会）
以上を除きすべて……『厚生』（中央法規出版）

単行本 一九八九年十月中央法規出版株式会社刊

稽古は花鳥風月に在り

「芸てえものは、実に、努力のもんです」

もう十五年ばかり前になるが、私の司会する番組に落語家の桂文楽が出演して、こんなことを言ったのを、今も鮮明に覚えている。

昭和四十六年も残り少なくなった十二月十二日の朝、桂文楽は七十九歳の生涯を閉じた。

どちらかと言えば、あまり器用とはいえない文楽が、晩年は“芸の極致”とまであがめられ、その見事なツヤと江戸ツ子の粹とを、はなし噺の中でいきいきとえがき出すことが出来たのも、一に努力、二に努力のたまものだったのだろう。

亡くなる少し前の八月三十一日、国立小劇場で催された落語名人会で「大仏餅」を演じていて突然絶句した。

その時、文楽は、

「申しわけありません。勉強し直して参ります」

と、潔くわびて高座をおりた。

何十回、何百回と演じた得意芸でも、健康をそこねたり、老齡化してくると、ド忘れという恐ろしい病いに見舞われる。文楽が、噺の筋道を見失い、高座で立往生した無念さは、いかばかりであつたろうか。その胸中、察するにあまりある。

落語という話芸は、ただひとり孤独でたたかうしかない。「心眼」「明烏」「素人鰻」といった文楽の名演を落語ファンは忘れないが、そうした卓拔せる話芸も、文楽に言わせれば、

「噺家の味方は、扇子と手拭だけです。それで客にうけなかったら自分が悪い

んです」

と、実にきびしく自分を律していた心がまえの問題だったのである。

自分の努力不足を棚にあげて責任転嫁をはかろうとする人間には、肝に銘じてほしい名言である。

大阪の放送局に勤務していた頃、文楽、といっても桂文楽ではない「文楽人形浄るり」にのめりこんで、多くの舞台を見聞し、沢山の得がたい知己を持つことが出来た。

中でも、竹本綱大夫^{つなたゆう}は、私にとってかけがえない人である。当時、大阪南区二ツ井戸の住まいに足繁く邪魔して、そのたびごとに面白い昔ばなしや有意義な芸談を聞かせてもらった。

綱大夫は幼少の頃から義太夫に対する才能が卓越していた。その天分に加えて、人一倍稽古が好きであった。

芸事は師匠と稽古によってきまるといってよい。「松屋町の師匠」^{まつちやまち}と言われ

て恐れられた三味線の名人六世広助は、礼儀作法にやかましく、その上、気むずかしいので、弟子たちの足は、つい、にぶりがちだったが、綱大夫は、広助の気性をつぶさに観察し、率先して厳しい稽古をつけてもらった。

広助は朝が早い。綱大夫は夜の明けぬうちに広助の家へ着いて門口で待っている。やがて広助が起き出して、ポーン、ポーン、と柏手を打ち神棚に参拝する様子が知れると、

「おはようさんでございます」

と、入っていく。広助はびっくりして、

「えらい早いな」

と招き入れ、みっちり親切に稽古をつけてくれる。稽古というものは、どうしてもあとの人ほど軽くなってしまうもので、いやいや後から出掛けたものは、師匠の不興を買うのみか、稽古も適当になってしまふ。早くさえいけばいい稽古がつけてもらえる、と読んで早起きを実行した綱大夫の作戦勝ちで、それも

生来の稽古好きがなせるわざであつた。

男盛りの頃は、随分女ぐるいもしました、と禿頭をかきかき照れ話をする綱大夫だったが、そばに付き添っているたつ夫人は、こんな話をしてくれた。

「ほんまに、よう遊んでくれはりました。長い旅から帰ってくるなり、着物を着換えて又出ていこうとしますねん。どこへ行きますねん？ と聞くと、友達と約束がおますねん、今夜は失礼します、とこれですわ。これだけひどい遊びをする人でしたけど、外へ出る時は、どんな時でも床本ゆかほん（義太夫の文章が書いてある舞台で使う本）をふところへ入れていきましたわ。どんな時でも、淨りの稽古だけはおろそかにしませんでした。女房として腹は立ちましたけど、この人、きつと偉えろなるやろなど、いつも思うてました」

居間には、綱大夫が敬愛する師匠の豊竹山城少掾が揮毫きぎょうした色紙が飾られていた。

「口伝くでんは師匠に在り、稽古は花鳥風月に在り」

これは、義太夫節の始祖、竹本義太夫が残した言葉だと言われている。表現はやわらかだが、大層つき放したつめたい教えである。

やる気があれば、いつ、どこでも稽古は出来る、日常の稽古をしない奴にいくら教えても無駄だ、先輩に教えてもらうことばかり考えるのは甘い、芸は孤独なのだ、自分でやるっきゃない、ときびしくいましめているように私には思える。

「口伝」をかみしめれば、目の前に師匠がいなくても、基本的な教えは学ぶ者の胸の中によみがえるはずだ。しかし、大切なのは「口伝」と共に「稽古」をおこたらないということである。自分の周囲、つまり「花鳥風月」の中に、えも言えぬ教えがひそんでいることを忘れてはいけけない。見るもの、聞くもの、ふれるもの、それらすべてを貪欲に吸収し、人間としての幅を厚くするように努力すれば、きっといつの日か、いい芸を生み出すことが出来るのだろう。

芸には天分がはっきりかわりあう。しかし、人間の生きがいや人生のよろ

こびは、天分とは関係ない。天から与えられたものを大切にし、自分に不足したものをみたくしていく努力こそ、一番大切なのである。身にすぎたものは師匠であり、不足せるものは稽古なのだ、と思い知らされる名言である。

竹本義太夫の教えを大切に、師匠を大切に、数々の名演を残した竹本綱大夫も、すでにこの世を去ったが、この名言だけは生き続けて私を鞭うつ。

(61年9月)